

米三・小史と共存共栄の精神

立花塾の逸材とうたはれた私の祖父石坂三次郎が若干十六歳、明治の変乱に焼け野原と化した長岡を後に、道中差を帯びて、信濃路、木曾と泊を重ねて、尾張（岩倉町付近）に出て、宮重大根六斗俵二俵を荷造させ馬の背に托して、宿場宿場を通過し荷物について長岡に帰って来た。それが私の店の種子取り扱いの始まりと聞いて居る。

足に任せて越後、会津の国境六十里越の峠路を福島県若松在神指村に辿り着き、酒井喜三郎氏（現主の曾祖父）に人参採種の話を持ちかけたのも、その間もない後のことであつたらう。

祖父の二代前は地方切つての米問屋（コメサン）といふ呼び名は、私の幼少時代にもよくとほつて居た。今度長岡市に合併された新市域の一部に五万分の一の地図にもものつて居る。石坂山といふ城跡がありその付近一帯を石坂郷と呼んで居り石坂小学校がある。

其の郷の円融寺といふ古い寺の五六百年前の記録の中に、石坂氏が銀三百貫を寄進した文書が発見され照合があつたことがあるが、祖父も語り継いで聞いて居るところがなかつたようである。もの本に従えば、新田氏一族がこの土地に勢力を伸ばす以前までは石坂氏は長岡南方に勢威を誇つた豪族であつたらしい。

種子商を志したのは、明治戦禍後の長岡周辺に蔬菜種子が需要された事によるが零落の果ての戦災でそうするより他に生きる道がなかつたのであろう。その後の祖父の奮闘談は思い出しても魂をゆすぶるものがある。無論交通の便などほとんどなかつた九十年前、超人的の努力をつづけて、日本海沿いを北海道まで文字通り草鞋がけで、お得意を開拓したのだ。

私の幼い頃、年末に十円紙幣で二千円位を胴巻きに入れて滝野川（東京）へ仕入にゆくときの祖父の希望に満ちた笑顔が、今でも眼に浮かぶ。夏休が終わる頃からそれまで約百日間倦むこともなく地方廻りをして、顔をやることは滅多にない奮励努力の結晶がその金額だつたらしい。この二字につきる祖父の人柄と努力の結果であることは無論だが、お得意様の需要で私の店が生まれお得意様の信用で私の店が育ち、お得意様の繁栄で私の店は今日在る。

戦争といふ大きな犠牲と空白と加ふるに戦災により、私の応召不在中、祖父、父とも世を去り、家財、店舗、土蔵とも一切を失つたが父祖積善の余慶で有り難い地盤を継承し、お得意様御協力の下、店舗倉庫共全く出来上がり三代目ながら売り家と斜めに紙を貼り出すこともない様だ。

一以之貫は私の处世訓、若い頃から天下一流の種子生産者と交を結び、最大であるよりは最良でありたいと期し、一誠良種の普及に努力して来た。信を万年の基とする卸問屋であり所謂生産業者ではない。良種を作ることと、良種を販売することとは違う。作る技術と売る能力とは必ずしも同じではない。

世上往々にして、己の作出した種子を、わが手で日本中に一手に販売して巨利を夢見るものがあるが、さうは問屋で卸すまい。我も益し他をも益す、共存共栄こそ、何人も念願する、業界終局の姿ではあるまいか。

石坂誠一郎